

越冬隊員の私的南極物語！

●柴崎和夫さんの「南極物語」

昨日、浦和高校同窓会総会後の講演会で伺った柴崎和夫さん(22回)國學院大學教授による「南極越冬隊の今と昔 ～越冬隊員の私的南極物語より～」を記憶に従って綴っていくことにいたしましょう。ただし、写真は色々なホームページより借用します。【写真①：柴崎さん】



*

昨年、木村拓哉さんのテレビドラマで有名になりました南極観測のお話をさせていただきます。私の知る限りでは、同窓生の中で私が唯一の越冬隊員ではないでしょうか？ 簡単に越冬隊の歴史からお話を進めたいと思います。

◆「宗谷の時代」探検の時代ともいえる

第1次隊(1956年日本出発)から第6次隊(1962年)までです。第1次隊の越冬は1957年で、第3次(59年)、第4次(60年)、第5次(61年)隊が越冬を行いました。越冬した人数は11～16名です。第6次隊は5次越冬隊の収容と昭和基地閉鎖作業を行っています。【写真②：南極観測船の宗谷全景】



この間のトピックスとしては、第1次隊がテレビでは他国の船に助けられているのですが、実際は帰路の途中でソ連の「オビ号」により救出されました。第1次隊は1957年1月29日にオングル島に上陸し、2月14日に越冬成立ということになります。

第2次隊は樺太犬の残留、第3次隊でタロ、ジロ発見がありました。第4次隊では福島伸隊員の遭難死がありました。現在、第53次隊が越冬しておりますが、大変危険な南極大陸において、日本人の隊員で亡くなった方は、実は第2次隊の福島隊員だけなのです。

*

◆南極観測の理由

昭和32年(1957年)から昭和33年(1958年)まで続いた、国際科学研究プロジェクト「国際地球観測年(IGY: International Geophysical Year)」を契機に我が国の南極観測が始まりました。

当時の日本は戦後10年の頃でようやく復帰を始めた頃であり、主食の米も十分でなかった時代です。そんな時代に、我が国は一致団結し、世界規模のプロジェクトに参加したのです。

*

◆観測船「ふじ」の時代 【写真③：砕氷艦ふじ】

海上保安庁から自衛隊の運行へ。1965年(日本出発)から1983年の第7次隊～24次隊。それまでは海上保安庁の人たちが観測隊員の移送を行っていたのですが、「ふじ」から海上自衛隊の移送に代わりました。「ふじ」は海上自衛隊の艦でもあります。



トピックスとしては、第9次隊が南極点に到達。第10次隊が隕石を発見。第11次隊がロケット観測・みずほ基地建設。1977年1月に昭和基地最高気温の10℃を観測しました。越冬をしていますと、零下で普通、マイナス10℃で少々寒い、さらに10℃下がってもそれほど寒いとは思わない、マイナス30℃になると大分寒いといった感じです。ですから、プラス10℃というとても暖かい状況です。一方、1982年9月には、昭和基地最低気温マイナス45.3℃を記録しています。衛星電話(通信)開始が1981年の第22次隊の時でした。オゾンホール観測(発見)は1982年、「みずほ」基地で700mの掘削を行ったのは1983年です。

私は、この「ふじ」での最後の越冬隊24次隊に参加しました。

*

◆「しらせ(初代)」の時代 【写真④：しらせ初代】

1983年から2008年。第25次隊から第49次隊。

トピックスは、1984年に発電棟が竣工し、1985年には「あすか」



基地が開設されました。87年からは「あすか」での越冬が始まりました。初の女性観測隊員は第29次夏隊(1987～88年)です。初の女性越冬隊員は第39次隊(1998年)のことで、ドーム「ふじ」の基地開設は1993年のことでした。

＊

◆「しらせ（2代目）」の時代【写真⑤】



2009年からの第51次隊から活躍しており、現在は第53次隊が越冬しています。貨物船であった「宗谷」から4代目の砕氷艦です。

＊

◆隊員の選抜 出発の1年前程度

隊員はどのようにして選ばれるのかというと、**公募と推薦**があります。公募は医師や調理師、現在では観測担当（研究・観測機材保守と観測）も募集しています。推薦の多くは関係者（大学、研究所、企業、日立、小松、ヤンマー、NEC等々）、その他報道などです。隊員には冬訓練（3月）の乗鞍岳があり、ここでは装備の使い方、テント泊を通じて「**越冬の覚悟**」確認（2年越冬もある！）が行われます。夏訓練（6月）の菅平高原では、座学他があり、越冬隊員は30～40名です。

＊

◆大きな関門は健康診断

健康診断は二つあり、一つが身体検査です。脳波、心電図（安静状態、負荷状態）、血液検査等々があり、**ここで異常が見つかる**と越冬不可となります。

次に精神検査（ロールシャッハ・テスト）と面談がありますが、**ここで異常があっても越冬できる？**そして検査は行きと帰りに受けるのです。

＊

◆往路:船の旅(晴海埠頭～フリマントル～昭和基地)

これは私たちの時代のことですが、晴海埠頭を出てから太平洋に出た瞬間から船酔いが始まります。まさに揺れと酔い（船酔い）との戦いです。砕氷船は砕氷のために揺れやすく造られているため、30度以上の揺れもありました。ずっと船酔いで寝て過ごしていたとび職の隊員もいました。船の上部にある隊長室の方が揺れが大きかったようです。

隊員は一応は士官待遇ですので、2段ベッドが与えられます。海上自衛官は雑魚寝でした。食事は一日4食で朝が6時、昼、夜が4次、夜食は麺類と決まって出てきました。喜ばれたのが麺類です。カップヌードルは、南極観測隊のために作られたものです。当時の風呂は海水でした。

＊

◆往路中のトピックス（事件）

海賊が出現して大騒ぎになりました。オーストラリア近くで小さな漁船に接近され緊迫しましたが、

自衛隊でも武器は積んでいません。儀式用の小銃のみのため、放水で対処していました。オーストラリアのフリマントルで補給と休暇があり、医務官から陸上での●●に注意が促されました。

南緯55度を通過して一路南極に向かいますが、ここから南極手当というものが付きました。氷海を歩き、冰山とも遭遇しました。アデリーペンギンが我々を出迎えてくれました。

＊

◆越冬成立（2月20日）まで

越冬というのは2月20日を過ぎたところで成立します。それは船が遠く去ってしまい、帰ることができないためです。2月1日に越冬交代式（基地引き継ぎ）が行われているのですが、建物の先住権は前次隊にあり、入室には許可が必要でした。越冬中は2畳程度の個室に入りますが、それまでは雑魚寝です。連日白夜のなかで輸送や土木、建設そして



引き継ぎときつい作業が続く、昼と夜が曖昧になります。休み無しの作業と寒さに慣れていないことで、前隊員とは大きく

違います。【写真⑥:柴崎さんのスライド】

＊

◆基地の生活

個室はわずか2畳、調理と発電機や機械などの設営で専門部隊は24時間休みなしです。食事は基本的に調理が担当しますが、日曜日の朝は隊員が交代で調理していました。様々な係を決めました。農協、漁協、映写係、新聞係『オングル新報』発行、バー係などです。食事や飲み物は、全員が公務員で全部タダです。ですから、日本に帰ってきてからが困りました。風呂は週1～2回。氷当番といって週1回冰山に出向き「そり」1杯の氷をツルハシで採取する肉体労働もありました。これが発電機の冷却水、飲料水、酒のロック用氷、現像用水となります。アップカマシと称するトイレ掃除もありました。娯楽は映画で日本では見られない貴重な映像やアダルトものもありました。現在は女性隊員もいるので、どうでしょうか…？ 楽しみもありましたが、5月2日までは氷の上にあったものが、翌3日には水上という恐ろしい経験もありました。また、地吹雪では数メートル先でさえ見えないということもありました。観測をしていてオーロラのはしらは格別のものでした。帰路は喜望峰からパリを経由して帰ってきましたが、まさに人生いろいろです。【完】